

薰衣香方甲香一兩、丁子香一兩、蘇合香一兩、白膠香一兩、甘松

右九種並須好者各自別擣用
麝羅飾以和使乾香均即成

〔榮花物語初花〕いまの世にみえきこゆる香にはあらでげにこれをやいにしへのくのえかうな

どいひてよにめでたきものにいひけんはこのかほりにやとさてをしかへしめづらしうおば
さる

〔源氏物語拾七〕くさくさの御たき物どもくぬえかうまたなきさまに百ぶのほかをおほくすき

にはふまで心ことにとのへさせたまへり

〔源氏物語三十二〕冬の御方にも時々によれるにはひのさだまれるにけたれんもあいなしと覺

してくのえかうのほうすぐれたるはさきの朱雀院のをうつさせ給て公忠の朝臣のことにえ
らびつかうまつれりし百ぶの方など思ひえてよににすなまめかしさをとりあつめたる心を

きてすぐれたりと略

〔實隆公記〕永正三年七月二十一日己亥陳外郎來薰衣香一袋惠之

〔親俊日記〕天文十一年五月廿日己巳薰衣香調合

〔勸修寺光豐公文案〕從女院御所薰衣香廿御拜領拙子ニ相心得可申越之旨被仰出候巨細之段岡
本美作守可被申候將又先日者罷越候處ニ于今不始御馳走祝著之至存候御腫物氣之處ニ御登
城別而満足ニ令存候猶期面之時可申述候恐々謹言

六月〇慶長十四年十八日

片岡市正殿

〔光豐公記〕慶長十五年六月廿日從禁裏板伊州江薰衣香拜領予御使於彼亭振舞有之

〔後撰和歌集離別九〕まなのへまかりける人にたきものつかはすとて

するが